○議長（竹島貴行君）　２番　塩原　勝君。

○２番（塩原　勝君）　まずは、東日本大震災の被災地の皆さんに心からお見舞い申し上げます。そして、一日も早い復旧・復興を祈念するところであります。

さて、つい最近までは一般質問を何度か受けてきました。今立場が変わって初めて一般質問するわけでありますが、いずれにしましても、村民の皆様のために、微力ながら尽力したいというふうに思っておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

舟橋村誌は昭和３年１２月１０日に初版が発行になっておりますが、大変苦労されたという話も、当時というよりも、遅くなって聞いたことがあります。そして、第２版は昭和３８年１０月１日に発行になっております。計算してみますと、もう２年ほどで第２版が出てから５０年、半世紀になろうとしております。

たしか私が教育委員会に入る直前まで、元議員の野崎議員が中心になっていろいろ準備に入っておられたというふうに聞いたことがありますが、本当に初めの段階で少し活動があって、その後とまっていたようにも思われます。

何しろ、村誌といいましてもいろんな内容があります。私たちはいろんなことを思い、考え、そして記憶するんですが、それらはいつしか忘れ去られていくし、人もどれだけかで順番にかわっていきます。そういったときに、いろんな形で記録されていくことが必要であり、そしてまた、それがまとめてあって、いろんな項目から簡単にいろんなことが学べるといいますか調べることができるようになっていると、大変都合がいいというふうに考えております。

現在、パソコンやその他いろんな記憶装置が充実してきておりまして、いろんなことでそういったことはカバーされてはおりますが、やはり１冊にまとめる必要があるだろうというふうに考えるところであります。

たしか非公式の場で、村長さんが村誌のことを十分考えておられることが伝わってきましたが、なぜか久しく公的の場では編さんについて話が出ていないように思うわけであります。

そういったことで、やはり歴史あるいは住民、人物、村政、産業、教育、防災、その他あらゆる分野について専門家をチームに組み入れて、まず準備に入り、そして人選とか内容とか、また経済的にはどのくらいの負担になるのか、その他いろんなことを話し合い、そしてその委員会をつくって何年か後には発行できればいいなというふうに自分

も考えるところであります。

そういったことで、村長さんはこのことについてどういうふうに考えておられるか質問いたしました。よろしくお願いします。

○議長（竹島貴行君）　村長　金森勝雄君。

○村長（金森勝雄君）　塩原議員の村誌編さんにつきましての質問にお答えを申し上げます。

村誌の発刊につきましては塩原議員が述べられたとおりでありまして、昭和３年１２月に第１編、昭和３８年１２月に第２編が発刊されたわけでありますけれども、その後、半世紀が過ぎようとしております。

この間に、昭和６０年代には第３編の発刊に向けての準備にかかったということでありました。当時、野崎議員、亡くなられた方でございますけれども、依頼して準備を進めてきたわけでありますが、１年半余りで諸般の事情により断念した経緯があるのであります。そしてその後、また２０年余りが経過しております。

村誌の編さんに向けた村民からのいろんな要望といいますか要請もあります。そしてまた、ことし１月の自治会長会議のときにも、ある自治会から、ぜひ編さんしていただきたいという要請がありました。

その中で私が感じることは、やはり新たに舟橋村へ来られた方、すなわち人口が３，０００人になったということでございますけれども、これも平成に入ってから人口が増加してまいりました。１５年かかって１，４５０人の人口が２，９００人になったということで倍増したわけでありますが、そういった短いスパンに新たに舟橋村に住まいされた方がおいでになるわけです。

そうなりますと、そういった方々がここに住居を求め住んでおられるわけでありますから、やっぱり舟橋村というのはどんな歴史を持ったところなのかと関心があり、あるいはまた、そういった方々がこれからの舟橋村の、何といいますか責任を持っていただける年代までおられるわけですから、コミュニティーの醸成といいますか、人の人脈といいますか、そういったことを十分知っていただいて、舟橋村が今進めようとしている、あるいはまた進めておりますけれども、協働型のまちづくりというのが非常にマッチしておるんじゃなかろうかと、こういうふうにも思っているわけであります。

一方では、そういった舟橋村の歴史を知っておいでになった高齢者の方が年々亡くなっているといった現実もあるわけでありまして、私にすれば、こういった思いから、一

日も早く、そういった方々が元気においでになる間に、編さんのきっかけと同時にそれを進めるということが大切でなかろうかと、こういうふうにも思っているわけであります。

議員がおっしゃったように、やはり専門家というか、せっかくつくるんだったら、教材にも、あるいはまたその他の面で利用できるような、しっかりとした村誌の編さんも必要でないかと、こういうふうなことも思っております。

そういったもろもろのことを検討していただくような機関を立ち上げて、ひとつ我々当局のほうへ提案していただくと、そしてスタートさせていただきたいと、こういうふうに思っておるわけであります。

いずれにいたしましても、費用というものはかかるわけでありますし、期間もかかると思います。そういったことを含めまして十分検討してまいりますので、どうか塩原議員を含めて、議員の皆さんもご理解をいただきますようお願い申し上げまして、私からの答弁にさせていただきたいと思います。

よろしくお願い申し上げます。